



ここにあるすべてを、
かけがえのない「宝もん」へ。

昭和電工(株)鹿瀬工場(鹿瀬工場タイムス 昭和29年新年号44号より)

もくじ

- 特集1 パネル巡回展
「鹿瀬・昭和電工・阿賀野川」
2
- 特集2 地域再発見講座
「阿賀野川ものがたり」
4
- 連載コラム
●映画「阿賀に生きる」とその周辺の人々
●それぞれの新潟水俣病
●「阿賀の宝もん」から考える地球環境
6
- インフォメーション
8

真の阿賀野川ブランドの確立を目指して。 流域の人々が流域の歴史に向き合う意味を探る。

地域に生きる人々が
自らの地域を見つめ直す
機会とするため。

新潟水俣病の発生を境に失われて
いった流域の「人と人の絆」や「人と自然
の関係」。その紡ぎ直しを目指す「阿賀野
川え〜とこだプロジェクト」では、新潟
水俣病の記憶と教訓を流域の未来に活か
す道を、地域に暮らす方々と共に模索し
ていくことこそ、「真の阿賀野川ブラン
ド」の確立につながると考えています。

そして、ブランドの確立にはそもそも、
地域の文化や産業が、数々の時代の波に
翻弄されつつも、先人たちの手でどのよ
うに育まれ、現在の姿に至ったかという
歴史を、地域に暮らす人々自らが深く知
り、その地で生きていく証やそこで生業
を営む拠り所にまで磨き上げられるか否
かが、実は最も重要な鍵を握っているの
ではないか。

それらを地道に続けていくことで、全
国の方々から阿賀野川流域の各地域が真
に評価を受け、本物のブランドとして認
知される日が来るのではないかと。

今号では、その観点から、まずは自らの
地域を見つめ直す機会として、パネル巡
回展と地域再発見講座を特集しました。

総合プロデューサー 小川弘幸

水俣病被害者の方への 給付の申請を受け付けています

「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」に基づき、給付の申請を受け付けています。

対象となる方	給付内容
次の①、②いずれにも該当する方 ①昭和40年12月31日以前に阿賀野川でメチル水銀に 汚染された魚などをたくさん食べたと認められる方 ※母体を通してメチル水銀を体内に取り入れた可能性がある方を含む ②一定の感覚障害(手足の先の方の感覚が鈍いなど)が認められる方	●一時金 ●療養手当 ●療養費(医療費の自己負担分など) ※症状により療養費の給付のみとなる 場合もあります

お問い合わせ先
新潟県生活衛生課 TEL.025-280-5204 または 025-280-5207
新潟市保健所健康衛生課 TEL.025-212-8169 または 各区役所健康福祉課
五泉市役所・阿賀野市役所・阿賀町役場またはその支所

阿賀野川え〜とこだプロジェクトフォーラム 「資料整備とロバダン!(炉端談義)から始まる 阿賀野川え〜とこだプロジェクト」



日時●平成23年3月27日(日) 14:00~16:20(開場13:30~)
会場●新潟ユニゾンプラザ 5階中研修室
定員●70名(先着順、定員を越えた場合はご連絡いたします)
参加●無料 申込締切●3月24日(木)
お申込・お問合せ先●阿賀野川え〜とこだプロジェクト事務局(Tel/Fax 0250-68-5424)

平成19年からスタートした「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」。
本事業が阿賀野川流域でここまで推
進できた鍵は、「資料整備」と「ロバダ
ン!」における地道な努力にあった。こ
の2つの個別事業に中心的に携わった
方々とともに、日々、現場で活用して
いる紙芝居・映像作品・パネル展を鑑賞
しながら、これまでの事業を振り返るた
め、「阿賀野川え〜とこだプロジェク
ト」初のフォーラムを開催します。

「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」とは?

正式には「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」(通称FM事業)と言い、阿賀野川流域の各地域が今も続く新潟水俣病と向き合い、それを乗り越えるような「人と人の絆」や「人と自然の関係」を紡ぎ直すため、流域の住民・行政・民間団体が手を取り合い、「新しい地域づくり」を目指して始まったプロジェクトです。

阿賀野川え〜とこだ! 憲章(事業理念)

私たちは新潟水俣病に学び教訓を伝承することで、負の遺産から新たな価値を創造していくことを目指します。阿賀野川流域の宝物を広く内外に発信しながら、公害により失われた人と人、人と自然、人と社会の絆をつむぎ直していきます。地域を愛する人が地域の未来をつくる「流域自治」の確立へ向けて行動します。
(阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業推進委員会)

編集後記

第4号はいかがでしたか? FM事業が行うパネル展や地域再発見講座を素材に、今後の地域づくりについて地域の皆さんがどう感じられたか探ってみました。現在は中流の安田地域で、安田瓦や草水石材、酪農や漁業、砂利業など、地場産業の方々とロバダン!を展開中。次号では、地元の方々とFM事業との接点である「本物の阿賀野川ブランド」について、さらに深まったヒントをお届けできると考えています。その他ご意見、ご感想、お宝情報もお待ちしております。第5号も何とか年度末の発行を目指します。ご期待ください!

阿賀野川え〜とこだより 第4号

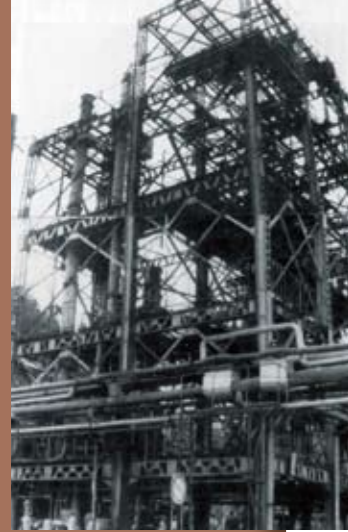
発行:新潟県(2011年3月 日)
企画編集:阿賀野川え〜とこだプロジェクト(事務局/〒959-2221 阿賀野市保田3866-1)

TEL.&FAX.0250-68-5424
aganogawa@niigata.email.ne.jp

「阿賀野川え〜とこだ! ブログ」
<http://www.aganogawa.info/>

引き続き、衣替え検討中…。





上:アセトアルデヒドの製造プラント
下:昭和稲荷大祭(大浜社宅にて)
提供/沖田悦氏



昭和電工(株)鹿瀬工場跡地(現・新潟昭和)
撮影/山口冬人(NPP新潟県写真家協会理事)

特集 1

鹿瀬・昭和電工・阿賀野川 ～光と影を織りなしてきた歴史～

かつて、阿賀野川の上流には大勢の人々が働く工場と、活気に溢れた社宅の人々の暮らしがあった。工場が生産する製品は私たちの生活を豊かにし、誰もがその恩恵を享受してきた。しかし、一方で、工場排水が阿賀野川の自然と人々に残した傷跡。そして、当時の面影が消えた地域の現在。その光と影の記憶から何を学び、どう未来へつなげるか。

阿賀野川上流は明治以降、急速に近代化を遂げ発展しました。その中心地は、阿賀野川の水力や東蒲原の豊富な鉱物資源など、地域の豊かな自然を最大限に活用した鹿瀬地域でした。

近代化の光と影の縮図

この地域で明治期に栄えた草倉銅山は、地域を豊かにして日本の近代化に貢献した一方、煙害や水質汚染も発生し、最後は銅を掘り尽くし衰退しました。

昭和に入ると、鹿瀬ダムでの電力や原料となる石灰石などが注目され、後の昭和電工となる石灰窒素の肥料工場が建設されました。

その後、昭和電工は時代が求める製品を次々と生産し、規模を拡大し続けます。企業城下町の鹿瀬には社宅が立ち並び、プールや幼稚園、売店、映画館など街中には文化の薫りが漂い、この頃が最も活気に溢れた時期でした。

高度経済成長期、日本中がモノの豊かさを追い求める大量生産・大量消費社会の到来と

もに、昭和電工は有機化学分野に傾斜します。電気化学方式だった鹿瀬工場でも、水銀を触媒としたアセトアルデヒドをフル操業で生産しました。

昭和40年、工場から阿賀野川に流れ出た有機水銀による新潟水俣病の発生が確認され、流域に深い傷跡を残すと共に、工業界は石油化学方式に転換していったため、鹿瀬工場は縮小されました。その後、鹿瀬地域からは賑やかだった当時の面影が徐々に消え、現在の姿に至っています。

地域の歴史から学ぶ教訓と未来

このように、丹念に掘り起こされた光と影の歴史を眺めていくだけで、当時の鹿瀬を知る人々の懐かしい記憶とは裏腹に、実は現在に生きる私たちが今後の地域づくりや環境問題に活かせる貴重な教訓の数々が見つかります。そのため、とりわけ地元の方々にこそ、自らの地域の歴史を見つめ直す機会としていただくと、今回のパネル展を企画いたしました。



工場正門における朝の出勤風景
「鹿瀬タイムス」昭和37年6月発行143号より



砂利の採取



パネル展「鹿瀬・昭和電工・阿賀野川」 阿賀町の温泉施設など好評巡回中!

明治から昭和にかけて、阿賀野川上流の歴史の中に刻み込まれた「近代化の光と影」を丹念に掘り起こしたパネルを制作しました。上流域の自然資源の豊かさ、昭和電工躍進の様子、夏祭りで賑わう社宅の路地、高度成長期に訪れた時代の転換、公害が発生した顛末…など、パネルを観終わった後、上流地域を始め地方の現状とその未来に、ぜひ想いを馳せていただければ幸いです。4月半ばまで阿賀町の温泉施設などで巡回展示いたしますので、どうぞご覧ください。

今後の開催スケジュール

通常のパネル展 2011/3/1 ~ 3/21 ●三川温泉「三川館」
2011/3/25~4/17 ●狐の嫁入り屋敷

ミニパネル展 2011/3/15~3/31 ●三川温泉「新かい荘」

※ミニパネル:通常パネル(A1サイズ)の半分の大きさですが、内容は全く同じです。

企画・問合せ先
阿賀野川え〜とこだプロジェクト事務局 TEL&FAX:0250-68-5424

これまでの開催会場

〈通常のパネル展〉

- 2010/12/18~1/3 ●角神温泉「ホテル角神」
- 2011/ 1/5~1/20 ●かのせ温泉「赤湯」
- 2011/ 1/22~2/7 ●御神楽温泉「みかぐら荘」
- 2011/ 2/9~2/27 ●新三川温泉「you&湯ホテルみかわ」

〈ミニパネル展〉

- 2011/ 1/5~1/20 ●三川温泉「叶屋旅館」
- 2011/ 1/22~2/7 ●御神楽温泉「ブナの宿小会瀬」
- 2011/ 2/9~2/21 ●御神楽温泉「みかぐら荘」
- 2011/2/23~3/13 ●麒麟山温泉「雪つばきの宿古澤屋」

来場者の主な感想

- とても懐かしく感じた。(60代/鹿瀬)
- 上流の光と影の部分が良く分かった。(50代/三条)
- 昭電の最盛期の賑わい、公害の発生そして衰退など流域の歴史が良く分かった。(60代/新潟)
- 昭電は日本の経済発展の代表のような感じ。一方、経済発展には公害発生がつきものなので、今の中国にもこのパネル展などで知らせてほしい。(60代/新潟)
- 下流域の小・中学校で実態を教えることが、未来への第一歩になると思う。(30代/新潟)
- 昭電が恩恵をもたらしたのも事実。今後は環境の町として発信できれば良い。(50代/鹿瀬)
- 難しいかもしれないが、心安らぐ文化の発信地として自立できれば素晴らしい。(60代/東京)
- 水力を活用して発展してきた。今後その豊かな自然環境をアピールしてはどうか。(30代/津川)



角神温泉「ホテル角神」



かのせ温泉「赤湯」



御神楽温泉「みかぐら荘」



新三川温泉「you&湯ホテルみかわ」



三川温泉「叶屋旅館」



御神楽温泉「ブナの宿小会瀬」



麒麟山温泉「雪つばきの宿古澤屋」

第2回 昭和電工社宅
ハーモニカ長屋から眺めた風景
 ～鹿瀬・昭和電工・阿賀野川～

ハーモニカ長屋と呼ばれた昭和電工社宅の生活を中心に
 あの頃の企業城下町・鹿瀬を皆さんと共に掘り起こしました。
 平成22年3月28日(日) 13:15～15:30 ◆新三川温泉 you&湯 ホテルみかわ (参加者80名以上)

参加者の主な感想

- 懐かしかった。今は景色は素晴らしいが、人口が減り淋しい思いをしている。(70代/阿賀)
- 当時は先進的だった会社が、なぜこんな公害を引き起こしたのか不思議だ。(50代/阿賀)
- 新潟水俣病を早く全面解決して、安全で美しい阿賀野川を全国に発信したい。(50代/阿賀)
- 過去の歴史も大切に、豊かな自然を利用し観光につなげてはどうか。(60代/新潟)



当日は雪椿関連グッズや山崎靴屋さんの食品販売など、東蒲原文化を代表する宝もんの数々も紹介



紙芝居「阿賀のお地蔵さん」の上演



高校時代まで社宅で過ごされた沖田信悦さんをゲストに
 迎え、数々の所蔵写真をもとに当時の様子を振り返る

第3～6回 阿賀野川の忘れられた光と影

心揺さぶられる紙芝居・映像作品・パネル展示を通して
 阿賀野川流域の光と影や地域の今後について考えを深めました。

- 第3回 平成22年8月22日(日) 13:30～14:30 ◆阿賀野市安田公民館
- 第4回 平成22年12月25日(土) 13:30～14:50 ◆角神温泉 ホテル角神
- 第5回 平成23年1月22日(土) 15:20～16:40 ◆御神楽温泉 みかぐら荘
- 第6回 平成23年2月12日(土) 13:30～14:50 ◆新三川温泉 you&湯 ホテルみかわ
 (参加者計110名以上)

参加者の主な感想

- 若い人が制作した紙芝居に感動。「豊かさって何だろう？」と考えさせられた。(60代/新潟)
- 紙芝居を人と自然の関わりがどうあるべきか子どもたちに伝える教材としたい。(50代/新潟)
- 繁栄が進んでいる時は、何か大きな見落としをしてしまうのだと改めて感じた。(40代/新潟)
- 生活の便利さと自然への影響…両立は難しいが、今後考えていきたい。(20代/阿賀)
- 今まで目をそらしてきたが、光と影の両面を見つめ直すことが明日に繋がる。(60代/新潟)
- この取組を続けることで個々人の意識が育まれ、未来へ繋がっていくと思う。(20代/阿賀)
- もっと大勢の阿賀町の住民にも参加していただき、後世に伝えていきたい。(70代/阿賀)



第4回以降は会場に併設されたパネル展示「鹿瀬・昭和電工・阿賀野川」を案内員が参加者へ解説



紙芝居「阿賀野川物語」の上演



映像作品「ハーモニカ長屋から眺めた風景」
 ～写真で綴る鹿瀬・昭和電工・阿賀野川～を上映

今後の
 講座開催
 予定

これまで、主に上流地域の歴史や宝もん、人とのつ
 ながりの中から、講座を開催してきました。現在は中
 流の安田地域で、「ロバダン!」(炉端談義)を精力的に
 展開中。次回の講座は、そうしたロバダン!で得られた
 地域の風土や歴史、文化、産業などをテーマに、来年度
 中流域の会場で開催予定です!ぜひお楽しみに!

**特集
 2**

**地域再発見講座
 阿賀野川ものがたり**

阿賀野川流域に生きる人々に、流域を「再発見」してもらう入口

「阿賀野川え」とこだブロ
 ジェクト」(FM事業では、
 地域再発見講座「阿賀野川も
 のがたり」シリーズを平成21
 年3月からこれまで計6回、
 流域の方々を対象に各地で
 開催してきました。今回は、
 これまで開催された地域再
 発見講座の様子を、皆さんへ
 まとめてお伝えします!

FM事業では、流域が新潟水俣
 病に向き合い乗り越えた末に確
 立される「真の阿賀野川ブラン
 ド」こそ、厳しい現状に直面する
 流域の未来を切り開く大きな可
 能性があると提唱しています。た
 だし、そもそも地域がブランドと
 して評価されるには、その地域に
 生きる人々自らが地域の歴史を
 深く知り、そこで生きていく証や
 拠り所にまで磨き上げることが、
 実は必要とされています。

そこで、FM事業では、流域の
 各地域がその動きに至る入口と
 して、まずは、流域の人々から自
 らの地域の歴史に向き合い見つ
 め直してもらう機会としていた
 だくため、地域再発見講座を開催
 しています。そして、新潟水俣病
 という大きな公害を経験した阿
 賀野川流域地域だからこそ、その
 経験がどの地域の歴史にも忘れ
 がたく刻み込まれ現在へとつな
 がっている事実を、流域各地の歴
 史に真剣に向き合う誰もが、あら
 ためて「発見」されるのではない
 でしょうか?

第1回 川からの恵みが暮らしを支えた

記念すべき初の開催! 失われつつある阿賀野川からの恵みについて、皆で語り合いました。
 平成21年3月14日(土) 10:00～15:00 ◆道の駅「阿賀の里」(参加者80名以上)



制作者「こっこ」による紙芝居「草倉銅山物語」の上演



神田栄さん(阿賀町)から昔の三川のサケ漁の話のを伺う



加藤準一さん(五泉市)によるサケのかぎ流し漁の実演!



大熊孝さん(新潟市)の講演「阿賀野川が教えてくれたこと」

参加者の主な感想

- 特に紙芝居が良かった。(60代/阿賀)
- 地球温暖化などのテーマもあれば良い。(50代)
- 便利だけど忙しい今の時代、昔の時間をかける不便さが大切だと思った。(20代/阿賀)
- 自然・人・暮らし・歴史・文化を地域資源としていかに大切に活用するか。(40代/新潟)
- 上流から下流までの住民が阿賀野川の未来を共通の土俵で考えることが必要。(60代/新潟)



講座
 こぼれ話
 1

紙芝居の拍子木

講座恒例の出し物と言えば、ご存知FM事業
 名物「紙芝居の上演」です。その際に欠かせぬ
 小道具が、「はじまり、はじまり」に合わせ
 てテンポよく打ち鳴らされる拍子木。何とそ
 の手作りの拍子木を、第6回講座に参加され
 た阿賀町在住の伊藤和夫さんから頂きました!
 「キハダ」という木で作られたそうで、高
 い音が鳴り響く! 思わぬ贈り物にスタッフ
 も感動...ありがとうございます!

講座
 こぼれ話
 2

講座に来れば楽しめる ☆ 阿賀のごっつお巡りレポート



- 第1回講座 ■ 阿賀野川弁当: 道の駅阿賀の里特製の弁当。鯉の洗い、鮎の塩焼き、三川豆腐コロッケ、メダカの佃煮、川蟹汁など、阿賀の恵みざっしり☆(当日の講座限定)
- 第2回講座 ■ ニシンや豆腐の粕漬、糀の甘酒: 山崎靴屋提供。東蒲原の発酵文化を代表する食品の数々。豆腐の粕漬が珍しい! ■ 荒沢こんにやく: 鹿瀬荒沢集落に住む母ちゃん達が丹精込めて作ったこんにやく。
- 第3回講座 ■ オランダ焼: 今はなき旧安田町の和菓子名店「金水堂白根屋」の銘菓を「くるりしよごら亭」が今に甦らせた珠玉の一品。
- 第4～6回講座 ■ 黒米の三色団子: いろり塾提供。古代米の一種「黒米」でつくった、食品添加物ゼロの珍しいお団子に、小豆餡・きなこ・黒ゴマをまぶしていただきます。黒米は白米と比べて栄養分が豊富、特にポリフェノールは血液をサラサラに。

連載コラム

映画「阿賀に生きる」とその周辺の人々

新潟水俣病の舞台ともなった阿賀野川流域に暮らす人々を、3年かけて記録したエンターテインメントドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」(1992年、製作:阿賀に生きる製作委員会、監督:佐藤真)。阿賀野川流域に生きる人々の中に刻み込まれた歴史や文化を、映画の登場人物など関係者の紹介を通じて発信するコラム。

船大工の遠藤武さん

カネ先生は私の母と同じ歳だったから、生きていけば95歳になる。夫の博さんと町外れの小さな家に二人で質素に暮らして居た。お互いに教員だったこともあって、晩年も子どもたちの健康やその未来を気遣って地元的生活学校などで活躍されていたのである。

遠藤さんとの出会い

その頃の私は20代でまだ独身だったが、カネ先生の誘いもあって生活学校の仲間に入れてもらった。水俣病の患者さんとも出会って間もなく、独りでやっていた「あがの通信」のガリ版刷りなども手伝って、舟大工の武さんを最初に訪ねることを勧めてくれたのである。お二人の散歩コースが阿賀野川の土手で、その真下にある武さんの家でお茶をいただきながら、水俣病の話しを聞いたという。もちろん、私も子ども頃から武さんの存在は知っていたが、その気難しさは評判で恐くて訪ねることができなかった。

それがカネ先生の紹介もあって舟づくりから水俣病の話しまで、気がついたら晩酌まで手伝う間柄になっていた。武さんの家は舟づくりの都



合で天井が低く、床高は窓越しの畑とほとんど同じでとても落ち着く。そこでいただくお茶の味わいは天下一品だった。

欠けたガラス窓

皆さんは映画「阿賀に生きる」で欠けたガラス窓から朝顔の蔓が茶の間に侵入し、花を一輪咲かせている場面に気づかれたらうか。

「そのまゝまでいいんだ、そこは朝顔が毎年あさいつに来る入り口なんだすけにね」と、大工の端くれだった私がガラスの入れ替えを申し出た時の武さんの言葉である。今時の家づくりは高気密高断熱でラップに包んだような住宅が当たり前で、冬には吹雪が入るであろう割れたガラス窓を、朝顔の花一輪のためにそのまま良いと、まるで良寛さんのように淡々と言った。

川船、山に登る

感覚障害のため、骨が見えるほどの大やけどを追って危篤になった武さんではあったが、周辺の協力も得て川舟を完成させていく物語は心に深く残るものとなった。

その後、ニューヨークで映画を見たというダグラスさん(米国の舟大工・船舶研究家は武さんの元へ弟子入りを希望して訪ねてくれたのだが、一九九七年に亡くなっていた。そして、海外でも活躍しているアーティストの井上廣子さんは武さんが残した川舟を越後妻有大地の芸術祭の山に展示してくれたのである。とてもシャイな武さん、あの世でこんな展開を面白がってくれているだろうか。

連載コラム

それぞれの新潟水俣病

新潟水俣病に向き合い、それを乗り越える流域づくりを目指して始まった「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」。このコラムでは、これまであまり伝えられてこなかった、新潟水俣病に対する流域の人たちのさまざまな思いや動きを伝えていきます。無関心だったり中傷したりするのではなく、お互いの状況を知り、わかり合うために。

二七患者と言われる切なき

「何たって失敗史だすけねえ」。水俣病のことを伺いに訪ねた私へ渡辺参治さん(94歳、阿賀野市)は頭をかきかき言われた。体操と唱歌以外はぼつとせず、いたずらしては「立ってれーっ」て叱られてばかりいた小学時代のこと。卒業後は瓦葺き職人として県内を回り、仕事はいつも一生懸命したが、同様に、おなごしょ(女衆との付き合ひもマメにしたので、5度の結婚と相成ったことなどなど。

でも一番の失敗史は、足の甲がばんばんに腫れ熱いだの冷たいだのがわからない、膝がやめる(痛む)、ペロが乾いて思うように話ができない、耳鳴りがひどいなどの病気になったことだった。

電工社宅の屋根の葺替え

参治さんは昭和電工社宅屋根の葺き替えに行ったことがあった。職人6人で自炊し、毎日、阿賀野川の魚を取って食べた。「俺は吞まねすけ、1食1匹、1日3匹だったけど、5人は酒の肴にしかも食べた。そのせいだろうかねえ。5人ともズンズンにおかしげになって、みんな俺より先に死んでしまった」。

参治さんは第二次訴訟に加わる。しかし、裁判は長引いて、患者は高齢化し、亡くなる人も出てきたことから一九九五年に和解の形を選択した。

ガワ(側)からの中傷

「いや、悪かったって、原因企業と国に謝って欲しかったけど、当時は言ってほくれなかつたし、そんげに

FM事業ワーキングチームメンバー:旗野 秀人

1950年生まれ。阿賀野市(旧安田町)在住。旗野住研取締役専務。映画「阿賀に生きる」の仕掛け人にして、新潟水俣病阿賀野市患者の会事務局も務め、冥土のみやげ企画を主宰する。

阿賀の宝もん☆発掘コラム

阿賀野川の歴史や文化、人や暮らし、自然環境…などを一歩深く探る各種コラムを毎号連載。

前号でお知らせしたとおり、今号から連載コラムがいよいよスタート！
映画「阿賀に生きる」に登場した人々が体現する考え方や流域文化、報道などから伝わらない「それぞれの新潟水俣病」、「阿賀の宝もん」と地球環境問題をつなぐと見える流域の未来…など各種コラムを通して、新潟水俣病に向き合い乗り越える流域づくりのヒントを発掘していきます！

短期集中連載コラム 「阿賀の宝もん」から考える地球環境

「地域の独自性」を大切に生かさないと暮らせなかった昔とは違い、現代では豊かな生活の裏で、世界中の資源を使い続け、地球環境問題が深刻化しています。このコラムでは、流域地域も地球環境もどちらも持続可能なように、忘れられた「流域の独自性」=「阿賀の宝もん」を再び生かせる道を探っていきます。

阿賀野川流域の「宝もん」 森林資源の現状

現代では、地球温暖化や生物多様性の危機などの地球環境問題が深刻化しつつあります。その地球温暖化の原因である二酸化炭素を吸収する役割としての森林の重要性が問われている中、世界の森林は日々刻々と減少し続けています。

日本の森林は今

一方、日本の森林は面積は変わりありませんが、統計上、木の容積が増え続けています。世界の森林問題が「木を切りすぎること」にあるなら、日本の森林問題は「木を切らなすぎる」ことにあります。自分の国ではまかないきれぬ森林資源がありながら、その8割を輸入に頼り、植林した人工林は手が行き届かず荒れるにまかせています。

京都議定書による二酸化炭素削減にカウントされるのは、「適切に管理された森林」で、手入れがされていない放置された森林はカウントされません。手入れがされない森林はほとんど炭酸ガスを吸収する効果が期待できないか、逆に枯れたり朽ちたりして炭酸ガスを放出すると考えられているのです。

阿賀野川上流の森林資源

かつて、阿賀野川上流の木材は建築用材としてその品質の良さが評判で、上流から下流に筏に組まれて運ばれました。越後屈指の大地主伊藤邸(現在の北方文化博物館)の大きな梁にも上流の杉の木が使われています。そして燃料としては、上流から木炭が帆掛け舟で新潟市まで運ばれました。このように、森林資源は「阿賀の宝もん」として重宝され、阿賀野川の上流と下流を結ぶ役割も果たしていました。

生活様式が大きく変わってしまった現在、上流の森林資源も有効に活用されなくなり、阿賀野川の上流と下流の繋がりは縁遠くになりました。そして、上流の森林も日本の他地域とたがわず、手入れがされないで荒れるにまかせています。

エネルギーとしての木質

薪などの木質をエネルギーとして使用する環境へのメリットは、木質が光合成による炭素循環のメカニズムを持っているため、大気中の二酸化炭素濃度が増えないことです。

木質を直接燃焼させエネルギーとして活用することは人類の歴史が始まったころから行ってきました。しかし薪木炭から石炭、そして石油へと、より取り扱いやすく熱量が大きい燃料へと変わってきて、現在は薪や木炭を燃料として使用している家庭は数えるほどしかありません。

もしも、阿賀野川流域に豊富にあるこの森林資源の木質を、再び燃料として活用する道が開け、温水や電気を作ることができれば、二酸化炭素の削減と森林の整備の両方を同時に進めることが可能となり、画期的なことと言えます。しかし、その実現には、木質の燃料使用が果たして経済ベースに合うかどうか、最も重要な鍵を握っています。

次回のコラムでは、その部分を掘り下げてみたいと思います。

阿賀野川え〜とこだプロジェクト事務局



撮影/山口冬人(NPP新潟県写真家協会理事)



筏の集積地 津川